

腎盂・尿管腫瘍

1989年1月から2007年10月の約18年間に入院加療を行った156例を対象とした。男性110例(71%)、女性46例(29%)で、発症年齢の中央値は69歳(40-93)であった。観察期間は中央値31.7ヶ月(0.3-223)であった。発症年齢は男女とも70歳代が最も多く、次いで60歳代が多かった(図1)。156例中、喫煙歴のあるものは90例、ないものは66例であった。喫煙歴と発症年齢の関係を図2に示す。発症年代別にみると比較的若い年代で発症する症例に喫煙者の割合が高い傾向が認められた。症状は血尿が93例(60%)と最も多く、次いで腎部疼痛14例(9%)、全身倦怠感5例(3%)であった。無症状で発見されたのは22例(14%)で、その半数の11例は顕微鏡的血尿を契機に診断された。患側は左50%、右46%で両側同時発生は4%であった。部位別には腎盂44%、尿管37%で腎盂尿管の同時発生は19%であった。初診時に転移がみられた症例は50例(32%)で、転移部位はリンパ節が34例と最も多く、次いで肺16例、骨と肝がそれぞれ12例、その他4例であった。腫瘍の肉眼分類は、乳頭状・広基性が57例(36%)、非乳頭状・広基性19例(12%)、平坦型12例(8%)、乳頭状・有茎性11例(7%)の順に多かった。組織分類は90%が尿路上皮(移行上皮)癌であり、扁平上皮癌3%、腺癌1%、その他(不明)6%であった。組織学的異型度はG3が49%と最も多く、G2が37%、G1が1%、不明13%であった。自然尿の尿細胞診は134例(86%)に施行され陽性率69%、カテーテル法による尿細胞診は91例(58%)で陽性率63%

であった。補助診断として尿中腫瘍マーカーであるNMP-22が用いられたのは60例(39%)で、その陽性率は63%と尿細胞診とほぼ同等だった。治療方法のうち、手術療法は126例(81%)に施行された。術式は腎尿管全摘除術(開放手術)91例、腎尿管全摘除術(鏡視下手術)16例、腎尿管膀胱全摘除術8例、両側腎尿管全摘除術2例、尿管部分切除術5例、TURのみ2例、腎摘除術のみ1例、膀胱全摘除術のみ1例であり、このうち110例(71%)においてsurgical CRが得られた。当科のレジデントマニュアルに従って術後に補助化学療法が施行されたのは48例であった。

生存解析の結果、全156例の全生存率は5年43%、10年34%であり、疾患特異的生存率は5年47%、10年44%であった(図3)。以下、各因子における疾患特異的生存率を示す。腫瘍部位別では予後に統計学的有意差はみられなかった(図4)。pT分類別ではpT3,4が有意に予後不良であり、Akazaraの分類(Cancer 59(7): 1369-75, 1987)におけるTs(T2以下)とTe(T3以上)の5年生存率はそれぞれ76%、37%であった(図5)。腫瘍の大きさでは長径3cm未満の症例が3cm以上と比較して有意に予後が良好だった(図6)。転移の有無では転移を有する症例が(図7)、組織学的異型度ではG3症例が(図8)、有意に予後不良であった。手術術式に関しては予後に差がみられなかったが、surgical CRが得られなかった症例の予後は極めて不良であった(図9)。なお、術後補助化学療法の有無において予後に有意差は認められなかった。術後の膀胱内再発は156例中50例(32%)にみられた。このうち、膀胱腫瘍の既往が

あったのは 15 例、既往なしは 35 例であった。非膀胱再発生存の検討では、膀胱腫瘍の既往の有無を含め、腫瘍部位（図 10）、組織学的異型度、手術術式のいずれにおいても有意差は認められなかった。

手術を施行した症例の 122 例について、比例ハザードモデルを用いた多変量解析の結果を表 1 に示す。性別、喫煙歴の有無、surgical CR の有無、Ts と T_E 分類、腫瘍の大きさ、組織学的異型度の 6 因子からなるモデルにおいては、surgical CR の有無と組織学的異型度が独立した予後因子であった。今後は、特に high stage 症例の予後改善に向けた補助化学療法を中心とした新たな治療戦略の構築、ならびに low stage, low grade 症例に対する腎温存療法の適応拡大を重点に取り組んでいきたい。

図1. 発症年齢分布

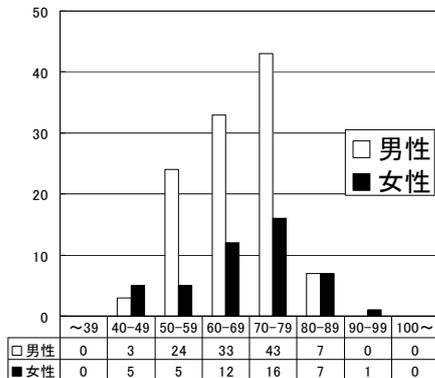


図2. 喫煙歴と発症年齢

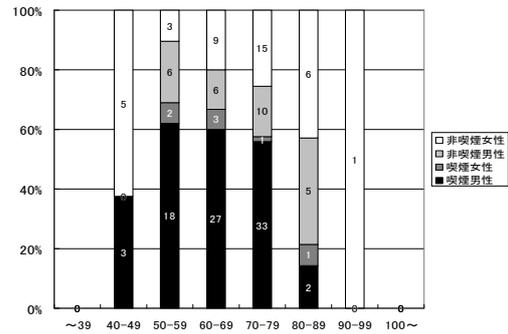


図3. 全症例の疾患特異的生存率

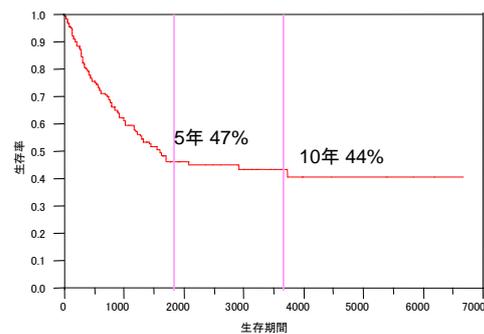


図4. 腫瘍部位別

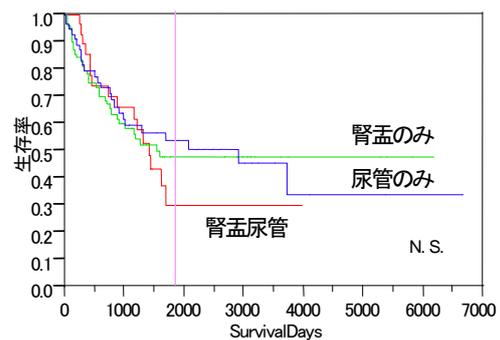


図5. T_s, T_E分類別

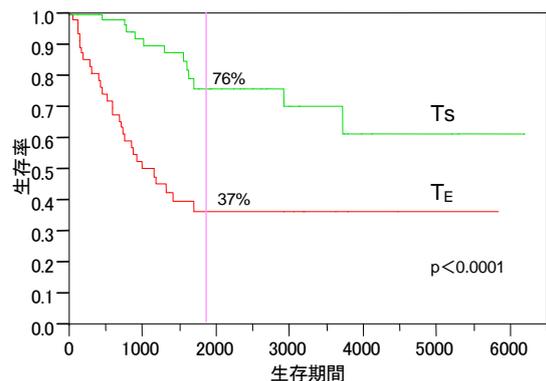


図6. 腫瘍の大きさ別

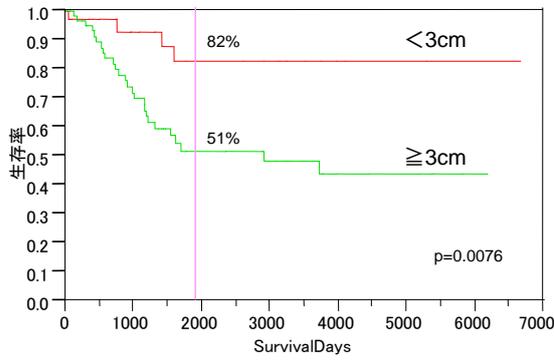


図10. 腫瘍部位別の非膀胱再発生存率

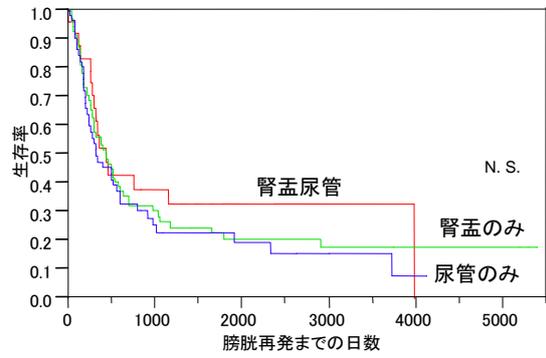


図7. 転移の有無

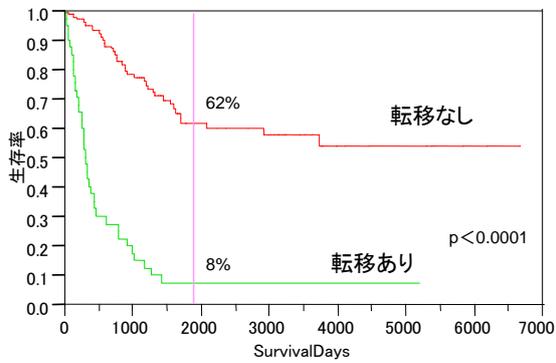


図8. Grade別

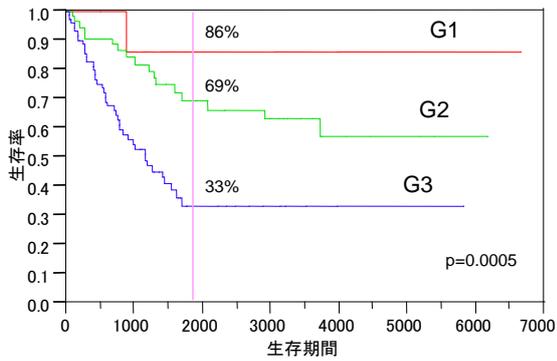


図9. Surgical CRの有無

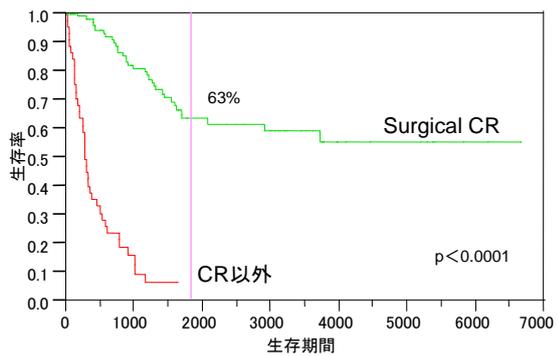


表1. 多変量解析(手術施行122例)

	Hazard Ratio	p値
性別 女性	1.249	0.4158
男性	1	
喫煙歴あり	0.831	0.7393
なし	1	
surgical CRなし	3.024	0.0001
あり	1	
TE	1.502	0.0547
Ts	1	
30mm以上	1.473	0.5084
30mm未満	1	
Grade 3	2.374	0.0345
Grade 1, 2	1	